
イブ・ファンタジー

Solitude

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イブ・ファンタジー

【Nコード】

N4167H

【作者名】

Solitude

【あらすじ】

心は大人びた16歳の少女ハルと、関西弁を喋るなぞの豚縫い包みピクの心温まる、ほんわかストーリー。完成品を投稿しているので停滞する恐れはありません（藁）

第一章 ハルのぬいぐるみ

「いい加減にしなさい春子！」

きつかけは、ひよんなことだった。食事のマナー。「ひじをつかないで」なんていわれて。ついてなかったから、「ついてません」っていった。だけど、「うそをつかないで！」って怒られちゃった。譲るわけにはいかないから、水掛け論になったのだけど、やっぱり間違いだったみたいね。今日はイブなのに。

「今年は、プレゼントもらえないかもね」

「……………」

去年のクリスマスプレゼント。かわいくないブタのぬいぐるみ。でも、今は大切な人生のパートナーだ。このこになら、何でも打ち明けられる。

「ねえ、ピク。ピクはどう思う？」

「うーん。せやなあ。やっぱ、譲ったらアカンことってあると思うんよ」

「うんうん。ってええ！ピクって男だったの？」

「驚くところちゃうやろ」

「ああ！ピクが喋った！」

「そうそう。そのリアクションや。ワイが期待してたのは。ったく、一ヶ月間暇だったで」

「一ヶ月？」

「せや。この間まで、猫のキトとか言うのが、いたやろ？ずーつとあいつと話してたんやけど、こないだコロツと逝ってもたからな」

「……キト」

「あーすまへんすまへん」

はあ。まさか、ピクが喋れるなんてね。ホント驚いちゃった。こういうのって小説とか、少女マンガとかにありがちよね。ってことは、私は、物語の主人公？なんちゃって。

「ううん。いいの。だけど、ピク。どうして、あなたは喋れるの？」
「うーん。せやな、まあ、理論で喋れるものやないやろな。強いて言うなら、なんとなくや」

「ふうん」

なんか、納得しないわね。でも、いいわ。だって、悩みに答えてくれるなんて、最高じゃない？

「なあ。ハル、ちょっと、外でえへんか？」

「え？ どうして？」

「ワシからのプレゼントや」

「え？ なになに」

「うーん。お楽しみってことで」

「じゃ、外にレッツゴー」

「ほな、先行ってるさかい、その格好なんとかしろや？」

その格好……？ ってええええええ！ シャツ着てないじゃん！ ブラとパンツだけじゃん！ なんつーエロい格好。もう。ピクに感情があるってわかってたらなあ。超ハズカしい。そういえば、前に、風呂上りの状態で、抱きしめたことあったっけ。ああ、もうやだ。自分で、顔が赤くなるのがわかる。

「ああ、そうだ。プレゼント、プレゼント」

そういつて、ベッドのしたに放り投げておいた、ホームウェアを着て、外にでた。

「おお。ハル。見てみい」

目の前には、雪が降って、地面には、

Happy birthday Haruko 16歳の誕生日おめでとう。

「わぁ……」

そこに、広がっていたのは、なんとも幻想的な光景だった。雪で、もやけた明かりに包まれた、文字と……林？

「ねえ、ピク。ここにこんな林、あったけ？」

「ん？ んなもん、知らんわ。なんせワイは初めて外にでたんやから」

「そっか、そうだよな」

「それより、どや？　ワイのプレゼントは」

「うん。ありがとう、最高の誕生日だよ」

「せやる。あ、そや。さっき、言い忘れたんやけどな、お前の親御さんやって、神様やないんやから、過ちは、あるで。許してやれや」
「……この期に及んで、説教なんて、聞きたくなかった」

あ、気づくと走り出してた。どうしよう。そうだ、あの林に行ってみよう。

「あ、ハル！」

うるさいよ、ピク。私だって、わかってるのに。

「ふう。ハルが一番よくわかってたんかもな。よっしゃ、追つか！」

——一方ハルは

「はあはあはあはあ」

疲れた。はあ、怒りすぎちゃったかな。

「家に、帰ろう」

ふう。まっすぐ来たから、まっすぐ帰ればいいね。ゆっくり、帰ろう。ひよっとしたら、ピクが迎えに来てくれるかも。

「ハルー！」

「ピク！」

「ああ、よかった」

「ああ、心配したで」

「じゃ、帰ろうか？」

「ワイ、どうやってきたかわからんで」

「大丈夫。まっすぐ歩いていけば」

「ああ？　ワイは二、三度曲がったで」

「え？　うそ！　ま、まあとりあえず、まっすぐ歩いていこう」

——しばらく歩いて

「ほれみい。行き止まりやないけ」

「どうする？」

「とりあえず、壁伝いに歩いていこうや」

「そ、そうだね」
「しかし、大変な状況やな」
「……このまま、家に帰れなかったら」
「帰りたくないか？」
「ううん。帰りたい。……助けて、怖いよ。ピク」
「……大丈夫とは言えん。けどな、プラス思考でいこうや。ワイらにできるのはそれくらいや」
「うん」
「あ、ワイ、気づいてもうた」
「え？ なにに？」
「足元見てみ？」
「え、あ、きれいな草。タンポポかな？」
「ワイももう少し、暖かかったら気づかなかったかもしれんが。ここ、雪ふつとらん。それどころか、春や」
「ああああ！ よく気づいたね。お手柄だよ。ピク！」
「ああ、しかし、どうして、こんなことが有りうるのか？」
「うん。わからないわね。しばらく考え込んでしまった。そんなとき！」
「おい、あそこにいるのは、冒険者のアキ様じゃないか？」
「ああ、ホントだ！ かれこれ、一ヶ月か？」
「そうじゃな。よく生きてたものだ」
「オーイ。アキ様！ 大丈夫ですかい」
「おい、オマイら。何もんじゃい？ ワイの主人にてえ出したら承知せえへんぞ？」
「……アキ様。この気持ち悪い、豚は？」
「私は、アキじゃないし、ピクは、気持ち悪くない！ 容姿だけがすべてじゃないんだから」
「おいおい、ハル。それ、どういう意味や？」
「あ、なんでもないから気にしないで」
「……むっちゃ気になるわ」
「と、とにかく、お引取りください！」

「う、ここは一旦退散するか」

「国王様に報告しよう」

「では、私の名前はアベル（アルベルト）です。以後お見知りおきを」

「私は、リユカ（リユケイロム）です」

はあ。怖かった。怖かったよあ。

「ハル。あんな連中につるまれても、その……俺のそばを離れないでくれよ」

「大丈夫。ピクはずっと、ハルのぬいぐるみだよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4167h/>

イブ・ファンタジー

2010年10月10日07時09分発行